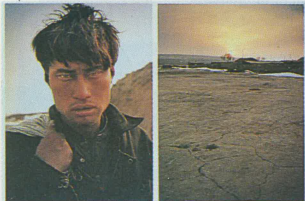


「CHINESE LIVE」
齋門富士男
PARCO出版
4800円

CHINA



「一期一会」の感動で綴った中国大陸 齋門富士男『CHINESE LIVE』

▶編集部

中国内陸部に住む人々のポートレートが中心の、130点以上の写真を収めた『CHINESE LIVE』という分厚い写真集が出版された。マツトな紙質と、大量の写真がかもし出す重量感が、寒風吹きすさぶような中国奥地の黄色い大地にぴったりと合っている。

1960年生まれの齋門富士男さんは、現在、広告や雑誌の分野で活躍しているカメラマン。旅が好きで、仕事の傍らアメリカ、ヨーロッパに始まり、インドやトルコを放浪し、出会った人々のポートレートを撮りためてきた。

3年前訪れた中国で、内陸の厳しい自然の中で力強く生きている

人々にシヨックをうけた。全く異なる世界として齋門さんを魅了したヨーロッパと違い、中国は「身近でありながら時間がずれている」のを感じ、とても懐かしく感じたという。それ以来、6回にわたり、長いときは1カ月以上も中国をまわった。

「ルートも決めずに車を借りて奥地奥地へと入っていく。彼らの日常の姿にそのまま出会う。政治的なものではなく、彼ら一人ひとりなのかなの中国を写したかった」

甘肅省の蘭州に降り立ち、寧夏回や内蒙古の自治区へ車を走らせると、検問に何度もひっかかることもあり、決して楽な行程ではな

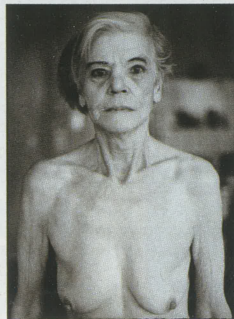
かった。カメラを向けただけで大あわてで逃げていく老婆や、カメラを壊す」と怒鳴られたりしたこともあった。しかし、齋門さんは導かれるように中国を訪れつづけ、そこで出会った人々の顔を、中判のカメラで丁寧に記録した。「もう、二度と会うこともないかもしれない、一期一会の人々を、形に残したい、という気持ちでした」

老女の皺、透明な視線。くつきりと写りこんだデイトールは、茫茫とした中国の大地を旅しつづけたら、出会った二期一会の瞬間を、いとおしみ焼き付けようとする齋門さんの思いを熱く伝えている。



初期の作品「Berlin 1983」

「Berlin 1985」



「Berlin 1982」



シュルツェを追いつめるが、このエピソードは、シュルツェの作家性の本質を語るものとして興味深い。どのように「存在するのか」という問いかけは、89年以降、この作家にまつわる命題として重くのしかかることにもなる。

受賞作品の、90年まで続けられた一連のカラー作品は、自国がたどる歴史に対する強いオブセッションを、断片的な日常の光景にダブらせる。切断された胴体がメニエーを掲げるレストラン。隣人にすらはげしくあらがう老婆。血に

自身に鮮烈な過去の映像作品に

染まる出産の光景。「ドレスデン」「ベルリン」と付されたタイトルによって、「日常」が、いつでも反転するという怖さを、シュルツェは私たちに突きつける。

しかし、「壁」の崩壊という決定的な構造の変革は、シュルツェ自身の根本的で全的な解体を迫ることになった。「すべてのコントロールを失った」と、当時を回想する作家にとり、何も見えてこない空白のときは、あまりにも長かったともいえよう。

繰り返す呼び戻されながら、ベルリン、ニューヨーク、そしてはるかなエジプトをめぐる混沌とした回路の上で、立ち止まるための小さな礎を見いだすことができたのは、古代遺跡の迷宮であった。

が、それは、絶対の存在としてそこにあり、その奥深い懐につつまれて、「戦士」は復活の時を知る。いずれにしても、今年発表された「エジプシャン・ダイアリー」が、来日したシュルツェを古い日本をめぐる旅に誘うきっかけとなったのは、確かなことであろう。



壁の崩壊後、シュルツェはエジプトの古代遺跡に被写体を求めた。今年刊行された写真集「Egyptian Diaries」



「Egyptian Diaries」から「Sinai 1993」



「Tuthmosis IV, Kairo 1995」

東川賞を受賞した グンドウラ・シュルツェの 写す「社会の現実」

▶ 山岸享子



「Dresden 1987,
The Little and the Big Step」



「Berlin 1987,
The Little and the Big Step」

IMAGE STATION

イメージ・ステーション



「Dresden 1987,
The Little and the Big Step」

Gundula Schulze グンドウラ・シュルツェ 1954年東独エルフルト生まれ。20歳のころから写真を撮りはじめ、ライプチヒの美術アカデミーに学ぶ。人間と社会に向けた鋭い洞察を作品化。89年壁崩壊の後、ニューヨーク、エジプトに住み、現在ベルリン在住。92年ニューヨーク近美「ニュー・フォトグラフィ」展に選出。96年東川賞・海外作家賞受賞のため来日して日本の取材を開始。



今年の東川賞海外作家賞を受賞した旧東独出身のグンドウラ・シュルツェが、受賞展に続き先ごろ東京で開かれた「現代ドイツ写真展」で、初期のモノクロ作品から近作

のエジプト・シリーズまでを集大成の形で展示し、注目を集めた。ベルリンを拠点に活動するシュルツェは、ドイツ現代写真がベッヒャーの構成的な作風を主流とするなかで、ミハエル・シュミットらに連なる伝統的な系譜から、自分が向き合う社会と人間への鋭い洞察を作品化してきた。シュルツェが、初期のモノクロ作品以上に、意識的な世界を築きはじめるのは、ライプチヒのアカデミーに通い始めた79年あたりからだだが、そのころの、虫眼鏡越しに小さなノートに見入る路上の老婆をとらえたスナップからは、さまざまなドラマが読みとれ、シュルツェの素早い観察力と、人間への強い好奇心が、すでにうかがえる。

後にシュルツェが、「喜劇的で悲劇的な物語」と名づけるシリーズのシリーズは、アポイントを取った相手の家で無作為とも思える構図で撮られているが、そこには作家の強い意図が込められていた。80年代半ばの東独では、今では神話的と思えるほどのヌードに対する厳しい取り締まりがしかかれており、いつのまにか「規制への挑戦」という概念そのものが最大の目的となっていた。後にこの果敢な企ては、秘密警察との水面下の攻防へと発展して、身を隠すほどに